■随想

盛岡での出来事

東京農工大学専門職大学院客員教授　瀬田重敏

3年前、盛岡市立下橋(しものはし)中学を訪ねたことがある。学校祭のメインイベント「環境シンポジウム」にパネラーとして出席するためで、東大生産研(当時)の安井至先生にご同行いただいた。盛岡市を貫通する川の1つ、秋には鮭が遡上する中津川沿いにその中学校は立つ。朝の学校は学校祭の興奮と緊張に包まれていた。受付の中学生の礼儀、言葉遣いに感心する。私たちを招いてくれた先生が出迎えくれて、早速校長先生にご挨拶する。

私達は司会役の生徒に紹介され、この日のために生徒達が準備したプリントが手渡される。プリントには、一昨年の「アフリカのチャドの環境と人間の生活」、昨年の「ドイツの環境政策」、今年は日本の環境基本計画を皆で読み、要旨と感じた問題意識が記載されている。予定の10時が迫り、会場の体育館に導かれる。

第1幕。向かって右に安井先生と私、向かい合う形で安藤さんという女生徒が座って幕が開く。会場には350人の全校生徒が椅子を並べて座し、その左には先生方、後ろには父兄と卒業生。総勢400人強。まず安藤さんが、簡単な挨拶と今日の目的を説明し、私達二人に質問をしながら二人の紹介をする形にもってゆく。今の立場、中央環境審議会とは何をするところか、どういういきさつで環境問題に関心を持つようになったか。安藤さんは赤い顔で緊張しているのがわかったが、はきはきとしてわかりやすく、きちんと質問と回答を重ねてゆく。こうして第1幕が終る。

第2幕。3つの机が扇型に据えられ、中央に安藤さんともう1人の司会役小川さんが座る。舞台に向かって右に開いた長い机には、安井先生、私、校長先生。舞台に向かって左の机には、3年代表、2年代表、1年代表の3人が座る。

まず、司会者が、自分達がこれまで3年にわたって勉強してきた環境問題認識について、プリントを使って説明する。自分達の環境はよくなっていると思うか、悪くなっていると思うか、というアンケートの設問で悪くなっているという答えが多いことに対しては、3年代表、2年代表、1年代表の3人にそれぞれ理由を尋ねる。ときに司会者はフロアからの質問を誘う。フロアの中学生達は、最初はおずおずだったが、1つ2つ質問が出るうちに、次々と手が上がり、一度に十本以上も上がるようになる。

印象に残ったのは、「瀬田さんにお聞きします」と質問した2年生。「旭化成はサランラップの環境負荷を減らすために代替材料の開発はしていますか」。これに私は「環境負荷として塩素を含んでいることを言っているのであれば、これは必ずしも正しくありません。塩素を含む合成樹脂なら、量的には圧倒的に塩ビですが、私は塩ビが環境に悪いとは思いません。ダイオキシン問題は燃焼温度を適切にすることで解決の目処はついています。世界で塩ビの需要が伸びていますが、その理由は社会基盤用の上下水道などの大型パイプと住宅の窓枠の2つの用途が伸びていることにあります。社会基盤用は発展途上国には必須、窓枠用はこれをやめようとすれば木を使う、すると『木を切るな』という別の環境運動が控えています。旭化成は塩ビを作っていませんが、私は塩ビが環境に悪いと思っていません。」と答える。

もう1つ、印象にのこった質問、これも2年生であったが、「家でお父さんと環境問題について話をしますが、お父さんは、盛岡も景気が悪い、景気が悪いと環境問題に目がいかない。環境をよくするには、まず経済をよくしなければならない、と言うのですが、瀬田さんはどう思いますか」という。私は「大変に鋭い質問ですね。私もお父さんのご意見に全く賛成です、経済がよくならなければ環境もよくならない、しかし経済は政治がまず先導しなければよくはならないでしょう」と答える。

「新エネルギーについて日本はどうするつもりですか」という質問。「原子力や火力はそれぞれに問題があるが、これは正しく使うことで十分存在意義があります。風力が環境にやさしいと言われますが、将来的に見てコストがどうか、景観を損なう、騒音

や電波障害、渡り鳥対策、風が弱いと働かないが強すぎると壊れるので止める、など、いろいろ制限もあって、風力が全面的に環境にやさしいと一概にはいえない。新エネルギーでは日本の技術が世界をリードしている面が多い。例えばリチウムイオン電池、太陽電池や燃料電池にも日本の力が大きな役割を果たしています。」と答える。

こうして約2時間半、司会者は「今日、私達はいろいろな問題意識を出し、それに対してある部分については違っていたと指摘され、新しい知識を得ることができました。これにより、また新たな問題意識をもって来年、再来年の勉強に生かして行きたいと思います。」と締めくくる。

大人の世界にもまれな、質問続出の感動的なシンポジウムであった。先生方によれば、中学生達の反応は「もっと質問したかった」「よくわかって勉強になった」「時間が足りなかった」とのこと。参加した父兄も、もし生徒達から質問が出なければ自分が質問しようと思っていたが、杞憂だった、と言っていたという。

先生が指導したとはいえ、事前に彼等がまとめた資料が上出来であったし、どんどん出る質問も的確で鋭い。質問を促されると中学生たちは次々と手をあげ、指名されるとすっくと立ち、「安井先生にお聞きします」「瀬田さんにお聞きします」と言って発言する。こちらも真剣に答え、最後に「こういうお答えでいいですか」と言うと「よくわかりました。丁寧に答えていただいてありがとうございました」と言って座る。こういう中学生がいるのなら日本の将来は決して暗くない、われわれが考える以上に子供達はわかっているし、今はわからなくても将来に向かって必ず強く記憶に残る、という確信を得たのだった。